

英検合格を目指した授業の取り組み

■ 多良 静也（教育学部）

■ 長谷川雅世（教育学部）

■ 松原 史典（教育学部）

キーワード：英語授業、小学校教員採用試験、英語資格、英検

1. はじめに

小学校に英語が入って久しい。遡れば、昭和61年臨時教育審議会答申で英語教育開始時期の検討が示され、平成4年「国際理解・英語学習」の研究開発校として大阪の公立小学校が指定された。そして、平成14年の学習指導要領の完全実施により小学校で英語教育が可能となり、平成29年告示の新学習指導要領では、これまで高学年で行われていた外国語活動が中学年へ下ろされ、高学年では英語が教科化されることとなった。この間、小学校の英語教育については、制度面はもちろん、教員研修などについても様々な取り組みがなされてきたものの、小学校教員が抱える不安や課題のほとんどが解決されず、さらに低学年化・教科化されることによって「評価」といった新たな不安も登場することとなった（米崎・多良・佃, 2016）。小学校教員の英語教育に関する不安や課題の中で圧倒的に多い意見が、教員自身の「英語力」や「発音力」についてである。この言語スキルに関する不安や課題は小学校へ英語が導入された当初から話題に上がっていたことであるが、残念ながら、今なお解消されぬまま引き継がれてしまっている。

小学校での英語（「外国語」）は、学習指導要領上は国語や算数や理科などと同じ教科扱いではあるものの、教授内容が教授言語であるという教科の特殊性ゆえ、心理的には、当面、他教科とは明らかに異なる位置づけで受け取られることは疑いないであろう。実際、英語教育に関する学会や研修会などで情報交換をする中で、「英語力の高い教員や英語指導力のある教員は小学校で重宝される」といった声を多く耳にする。この特殊性は、小学校教員採用試験（以下、「採用試験」と略す）において英語資格取得者に対して一部の試験を免除したり、加点したり、特別選考を設けたりと如実に現れている。

では、小学校教員を目指す本学教育学部学生（以下、「教育学部生」と略す）の中で、卒業後に教壇に立った際に英語力や英語指導力が求められることをどれだけ意識しているのだろうか。英語教育コースが開講している英語科指導法、音声や文法、文学、異文化などの受講生の多くは英語教育コースに所属する学生と中学校・高等学校の英語教員を目指す学生である。「教育に関する専門的な学習」に位置づく「小学校外国語活動・英語教育」でもその受講生の多くは同じである。つまり、これらの学生以外は小学校の英語教育や英語そのものに関する知識や経験がないまま小学校の教壇に立つことになってしまう（急いで付け加えるならば、

2020年度からは「初等英語科指導法」が開講されるため、すべての教育学部生が小学校の英語教育に関して一通りの知識を身につけることが期待できる)。また、英語力については、採用試験で加点の対象となるTOEICテストの教育学部生の受験率が他学部に比べてかなり低いというデータがある(後述)。このような状況を改善するためには、教育学部生の英語指導力、そして、英語力そのものを向上させるための体系的な英語教育システムの構築を行う必要がある。

そこで、試験的な試みの一つとして、教育学部開講「英語基礎演習Ⅱ」の枠組みで、教育学部英語教員(以下、「学部英語教員」と略す)が直接教育学部生に英検資格取得を意識させた授業を行った。共通教育の枠組みで英語力を向上させる授業は全学的に展開されているが、学部英語教員が教育学部生を直接指導する機会はなく、教育学部生に必要な英語力や英語学習の意義など彼らを取り巻く状況を踏まえて理解している学部英語教員が直接指導する機会があってもいいのではないかと常々考えていた。

次章以降では、採用試験における英語資格取得者の優遇措置と教育学部生の英語学習に対する意識を整理し、その改善策の一つとして試みた授業の概要と受講生の英検受験の結果および授業アンケートから見える本授業の成果、そして、まとめとして、英語教育システムの構築において考えなければならないことをいくつか述べたい。

2. 採用試験における英語資格取得者への優遇措置と教育学部の現状

多くの都道府県・政令指定都市で行われている採用試験では受審者の英語力を見る指標として英検やTOEICが活用されている(文部科学省, 2017; 国際ビジネスコミュニケーション協会, 2017など)。文部科学省(2017)によれば、全68都道府県・政令指定都市に平成29年度採用選考の実施方法の調査をしたところ、小学校の英語に関して、①小学校外国語活動に関する筆記試験を課しているのが53県市、実技試験は24県市、②英語の資格による一部試験の免除・加点制度・

特別選考を行っているのが53県市、うち加点制度は30県市と、多くの都道府県・政令都市で英語資格取得者への優遇措置が施されている。

もちろん高知県の採用試験も例外なく、その募集要項に「特定の資格等による加点」が掲載され、「英語に関する資格」の欄にその詳細が示されている。小学校教諭および特別支援学校小学部教諭の受審者については、「英検2級合格者、TOEFL PBT480点以上(iBT55点以上)取得者又はTOEIC520点以上取得者」に対して10点加点、「英検準1級以上合格者、TOEFL PBT550点以上(iBT80点以上)取得者又はTOEIC730点以上取得者」に対しては15点加点となっている(ただし、平成27年7月以降の取得者に限る)。ちなみに、中学校教諭、高等学校教諭、特別支援学校中学部・高等部教諭の英語の受審者については、「TOEFL PBT580点以上(iBT92点以上)取得者又はTOEIC800点以上取得者」に対しては15点加点、「英検1級合格者、TOEFL PBT600点以上(iBT100点以上)取得者又はTOEIC900点以上取得者」に対しては20点加点となっている。いずれも、出願時に、[スコア申請][加点申請]することで、「第1次審査及び第2次審査の審査項目の合計点にそれぞれ加算される」こととなっている。

このように教育学部生に一定程度以上の英語力が求められている中、彼らは英語学習に対してどのような意識を持っているだろうか。英語教育コースに所属する学生と中学校・高等学校の英語教員を目指す学生を除外し、教育学部2年生の中から無作為に10名を抽出し、英語学習に関する簡単な質問を試みた。その結果、「英語学習の必要性を感じていますか?」に肯定的回答をしたものは3名のみで、否定的回答をした7名に対して「なぜ必要性を感じていないのですか?」と質問したところ、「英語を専門にしようと思わないから」、「高校で英語学習を諦めたから」、「高校までの英語力があれば小学校でできると思うから」、「英語を学習する時間的な余裕がないから」があがった。これは質問項目を吟味して大きなサンプルサイズで体系的に行ったものではないが、教育学部生全体の英語学習に対する本音が垣間見えよう。

また、英語力の向上についても積極的な姿勢はほとんど見られないと思われる。学務課教育企画係から頂いたデータによれば、過去3年間の TOEIC 公開テストの教育学部生の受験者数は1年生0名、2年生4名、3年生6名、4年生0名とわずか10名である。教育学部生の英検受験に関する詳細な情報はないために極端な一般化はできないものの、英語資格取得に関する興味関心が希薄であるのが教育学部生の現状ではないだろうか。

小学校へ英語が導入される前の採用試験で英語力が問われることはもちろんなかったが、英語が教科化されるようになった今では、一定の英語力が問われている。しかし、教育学部生の英語学習や英語資格試験に対する興味関心は低く、教育学部の第3期中期目標(高知県における小学校教員占有率)にも掲げている教員採用率35%を達成するためには、小学校で英語の授業ができる即戦力が採用試験で求められていることを鑑みると、学部としての英語教育システム作りを真剣に考える必要がある。

3. 授業の実際

3.1 受講生

授業は、平成29年度後期開講の「英語基礎演習Ⅱ」(木曜5時間目)の枠で実施した。英検取得を目指した授業内容であることから、すでに単位を取得している学生や他コースの学生で履修をしたいと考える学生もいると思われたため、学務課より教育学部生全員に対してメールで情報提供をしてもらった。その結果、34名の学生が受講することとなった。受講生には、現在の英検取得級や TOEIC の得点などを報告してもらい、その結果を踏まえて、英検準1級コース2クラス、英検2級コース1クラスの3つのクラスを準備した。英検準1級コースには合計24名、英検2級クラスには10名が属した。なお、授業の設置目的などを説明する場や時間が十分に確保できなかったために、受講生の多くがすでに英検2級を持っていて英検準1級以上を目指す学生であり、英語教育コース所属学生以外、英語教育コース以外に所属し中学校・高等学校の英語教

員を目指す学生以外の受講生は2名であったことは示しておく必要がある。

3.2 授業内容

初回の授業では、オリエンテーションとして、「なぜ小学校教員を目指す学生に高い英語力が求められているのか」、「なぜ英語の資格が重要なのか(採用試験と関連付けて)」、「なぜ文法や発音といった言語形式が重要なのか」といった内容を学部英語教員と受講生で一緒に考えていくところからはじめた。第一筆者が担当する英検2級のクラスでは、現在の小学校英語教育を取り巻く状況、そして、実際に小学校教員が抱く不安や課題などを紹介し、受講生と意見交換をしながら、受講生自身の考えを整理させた。特に、資格取得については、この授業の根幹にあたるために丁寧に説明を行った。英語教育は、入試や資格試験といったある特定の目的のために行われるのではなく、もっと広い視野に立った全人教育をも踏まえたものでなければならないと筆者らは考えている。大学の授業が資格試験を目的とした塾・予備校的な発想で取り組まれることに対しては一定の批判があるかもしれない。しかし、教育学部生の英語資格取得に対する興味関心が希薄である一方、採用試験で英語資格取得者に対する優遇措置が施されていることを鑑みると、彼らの目の前の大きな目標である採用試験合格を見据えたゴール設定をすることは有意義であるとも考えることも重要ではないだろうか。入学した早い段階で、将来のことを見据えて英語学習を継続的に行うことの必要性を意識してもらうことは、現在の小学校英語教育を取り巻く状況を踏まえると、教育学部にとっては重要な使命の一つである。

以上のような観点を共有したあとで、2回目以降の授業の進め方について説明を行った。2回目以降は、各クラスで設定された英検のレベルに即した文法・語法問題、語彙、長文、作文、リスニングに関する課題を宿題として与え、翌週答え合わせをして、教員がその解説を行った。解説は、単に答えを言うだけでなく、関連の文法事項を取り上げたりしながら、なぜ間違いなのか、あるいは、その間違いが相手にどのように理

解されるのかなど、小学校の授業でも使える新たな情報を追加しながら行った。それが終わったら、学生同士でペアとなり、英検の面接の練習を行った。一人は面接官役、もう一人は受験者役で、入室から退室まで実際の英検の面接と同様の手順で行った。面接カードなどの必要品は学部英語教員が用意をした。最初の数回、面接官役は試験問題の英文を読み上げるのにも慣れたり、受験者役は面接官役の英文の読み上げがぎこちないために何を質問されているのかを聞き取るのに苦労をしていたため、模擬面接が終了するまでに必要以上に時間を要した。しかし、数回このようなロールプレイを経験すると、面接官役はわかりやすい発音で流ちょうに読み上げることの重要性を認識し、単語や英文の音読練習の場面での姿勢に大きな変化が見られた。また、受験者役の学生は、自分の意見を即座に英語で述べるという練習を経験したものが少なく、最初は考える時間、沈黙の時間が圧倒的に多かったが、回を重ねることで、問われていることを瞬時に理解し、そして、即座に英語で言おうとする姿勢ができあがってきた。

4. 結果

4.1 平成29年度第2回英検受験および合否状況

受講生の平成29年度第2回英検の受験結果をまとめたものが表1である。1次試験当日にクラブ活動など

のために受験ができないものがいたため、25名の受講生の結果である。

最終の結果を見ると(表1【2次試験】)、合格者は、英検1級0名、英検準1級3名、英検2級3名であった。しかし、1次試験で不合格となった受講生の平均点は、英検1級1959点(合格基準2028点)、英検準1級1640点(合格基準1792点)であり、合格基準に若干足りない得点で不合格となっていることがわかる。2次試験においても、残念ながら英検2級で1名不合格となったが、合格基準まであと8点(460-452=8)と非常に惜しい結果であった。英検取得を目指して半年間授業を行った結果、合格者数は少なかったが、それでも不合格者のほとんどが合格基準に非常に近い得点まで達していることから、採用試験で求められている英検2級以上の英語力に近づくことができたと言っても過言ではない。

4.2 受講生のアンケートから見えてくるもの

受講生には全ての授業が終了したあとに、授業の感想を200字程度の日本語で回答をしてもらった。回答はGoogleフォームを利用してWeb上で収集し、得られたデータをExcelファイルとしてダウンロード、誤字脱字などが無いことの確認作業を行い、KH Coderによって、共起ネットワーク図を描画した(図1)。紙面の都合上、共起ネットワークに関する詳細な説明は

表1. 受講生の英検受験状況

【1次試験】

	受験者数	合格者数	合格者平均スコア	不合格者数	不合格者平均スコア	合格基準
英検1級	2	0		2	1959	2028
英検準1級	19	3	1836	16	1640	1792
英検2級	4	4	1630	0		1520

【2次試験】

	受験者数	合格者数	合格者平均スコア	不合格者数	不合格者平均スコア	合格基準
英検1級	0					
英検準1級	3	3	529	0	0	512
英検2級	4	3	469	1	452	460

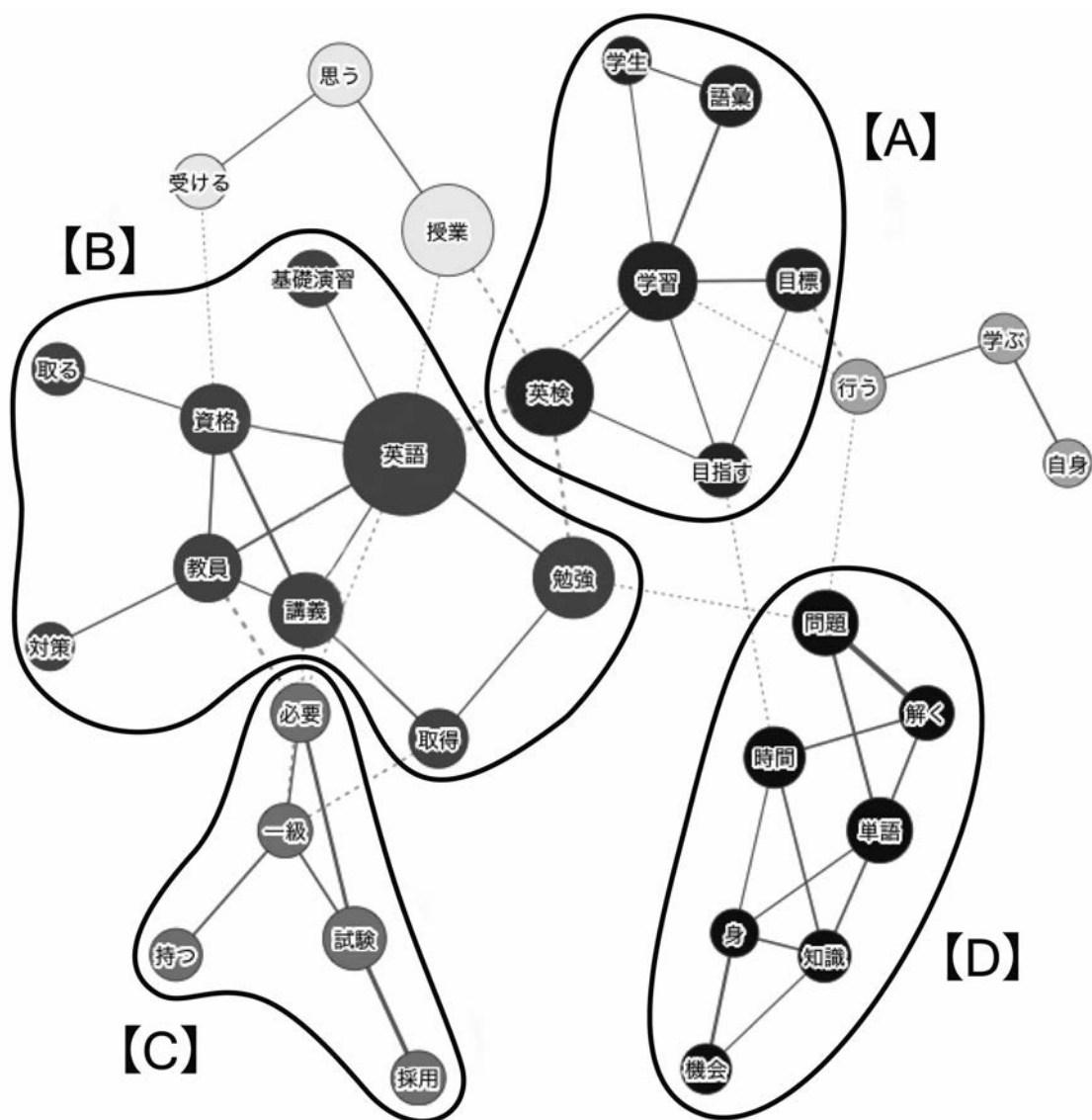


図1. 受講生の授業感想に関する共起ネットワーク

割愛する（樋口，2014；米崎・多良・佃，2016などが詳しい）。

図1の共起ネットワークから、この授業を受講した学生が感じたことについて、【A】「学習、英検、目標、目指す」といったキーワードから、資格試験という目標に向けて学習することの大切さの認識、【B】「教員、英語、資格、対策、講義」というキーワードから、資格試験対策のための授業の価値付け、【C】「採用、試験、持つ、必要」というキーワードから、採用試験のために資格を持つことの大切さの認識、【D】「問題、特、時間、機会、知識」というキーワードから、語彙や文法などの言語形式について勉強することの大切さ

の認識、と4つのことが読み取れる。

以上は全受講生の自由記述の分析結果である。先述したように、対象となった学生のほとんどは英語教育コースに所属する学生、そして、英語教員を目指している英語教育コース以外の学生であるが、メールでの呼びかけで受講をした英語教員を目指していない学生の自由記述には上記のことが明確に現れているので、以下に原文を掲載する。

「私は、(1)高校まで英語は苦手で避けてきましたが、小学校の先生になるためには英語が必要であることを知り、英語の資格を持っていない私はこれではいけな

いと思って、受講しました。大学英語入門のときと違って、(2)目的意識がはっきりとしていたので、半年間がんばることができました。今回英検に合格できて、(3)初めて資格の大切さやありがたさを感じました。(4)採用試験はまだまだ先ですが、英語についてもしっかりと力を付けていきたいです。」

【波線(1)】 小学校の教員にも英語力が問われていることを知る、【波線(2)】 授業のゴールが実用的なものであり明確となっているために学習意欲が高まる、【波線(3)】 採用試験での英語資格の大切さが認識できる、【波線(4)】 英語学習を継続的に行いたいという学習継続の姿勢が芽生える。

5. まとめ

教育学部生に対して、小学校教員であっても一定以上の英語力が問われていることや英検などの英語資格取得者には採用試験時に加点がされることなどの情報を提供し、英検取得という実用的な目的意識を持たせ、半年間の授業を行った。英検合格者数という点では満足いく結果は得られなかったものの、結果でも述べたとおり、合格ライン近くで不合格になっているものがほとんどであった。また、共起ネットワークには表現されていないが、アンケートの中には「今回は不合格であったが、あと少しで合格できるとわかり、やる気が出てきた。次回は絶対合格します」と力強い感想があったことから、この授業は、半年間ではあったが、英語力の向上はもちろん、小学校教員になろうとする学生への英語の必要性の理解を促すこと、英語資格取得に対する意識づけ、英語学習の継続性等に対して、大きく貢献したことは事実である。

小学校での英語教育が低学年化、そして、教科化されたことと教育学部に与えるインパクトは大きい。採用試験では英語資格取得者に対する優遇措置が施されるなど、英語は当面の間は特別視される教科であると言っても過言ではない。第3期中期目標で教員採用率35%を掲げる教育学部は、小学校での英語教育を取り巻く状況をチャンスと捉えて、この機会に英語教育に

関するシステム構築を進める必要があろう。筆者らが考えている早急に検討が必要なものは3つある。(1) 新入生を対象としたオリエンテーションの充実、(2) 学部英語教員が直接教育学部生を指導する授業の開講、(3) 教育学部生用の Can-Do リストの開発である。(1)については、4月に行われる新入生オリエンテーション時に、教育学部生に対して、採用試験を見据えて、高い英語力、具体的には、英検2級以上の英語力が求められていること、そして、採用試験までに英検2級以上を取得しておくことで加点対象となることなど、彼らを取り巻く小学校英語教育事情の詳細を提供し、英語学習や英語資格取得に強い興味関心をもってもらうようにすることが必要である。(2)については、学部英語教員が教育学部生の指導を直接行うことによって、教育の場に適した信頼関係を築くことが可能となる。この信頼関係の構築は学生にとって重要な意味を持つ。英語の授業で常に顔を合わせ、授業外でも同じ建物で生活するという利点から、英語学習の支援や応援の声かけを気軽にすることができ、学生との心的距離が縮まり、学生は英語についての質問や英語学習の悩みなどを気軽に相談できるようになる。この繰り返して、教育学部生の英語学習意欲が高まっていくものとする。そして、(3)については、学年ごとに英語で何ができるようになったのかを自己評価させるような教育学部独自の英語 Can-Do リストの作成が急務である。通常のコミュニケーション活動において英語でどのようなことができるかという項目とは別に、英語の授業で英語を用いてどのようなことが可能か、といった教育学部独自の Can-Do リストの開発が必要である。

教育学部生の中には採用試験で高い英語力が問われていることなど考えてもみなかった人も多いただろう。しかし、英語は教科として確実に小学校の授業として導入される。「小学校で教える英語は簡単だから高校までに学んだ知識で指導できる」といった誤解をしている人もいるが、果たしてそうだろうか。小学校の英語の授業で必ず登場する自己紹介の場面で「私は猫が好き」と総称の概念を表す英文 “I like cat.” に何も違

和感を感じない学生が少なくない。学生が教壇に立ったときに正しい、そして、適切な英語を指導できるようにするためにも、教育学部の英語教育システム作りが早急に行われなければならない。

謝辞

本研究を行うにあたり平成29年度教育研究活性化事業経費（教育改善・就学支援）のご支援を頂いた。この場をお借りしてお礼を申し上げる。

引用文献

樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－』ナカニシヤ出版。

国際ビジネスコミュニケーション協会（2017）「TOEIC Tests 教員採用試験における活用状況 [2018]」 https://www.iibcglobal.org/library/default/iibc/press/2018/p100/pdf/kyouinsaiyou_katsuyou2018.pdf（閲覧日 2018年9月27日）

文部科学省（2017）「平成30年度公立学校教員採用選考試験の実施方法について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1401024.htm（閲覧日2018年9月27日）

米崎里・多良静也・佃由紀子（2016）「小学校外国語活動の教科化・低学年化に対する小学校教員の不安－その構造と変遷－」 *JES Journal* Vol.16, pp.132-146.